

南ベトナム取材旅行

矢野 暢

にわか記者としてサイゴンへ

読売新聞から、「これがベトナムだ」の企画に加わり南ベトナムに行くよう依頼を受けたとき、研究生活を一時中断するのは少し気がひけたが、短時日で済みそうだったし、またベトナム旅行は新聞記者として行くに限るともきいていたので、二つ返事で引き受けた。5月のはじめ、日野啓三さんの書いた「ベトナム報道特派員の証言」という本を片手に、サイゴンに向かった。この本は、あまり知られていないが、優れた本である。そのなかに従軍記者の人間の条件、という一節がある。

- 1 何でも食べられること
- 2 アレルギー体質はいけない
- 3 分裂型の性格はいけない

この三つが従軍できる基礎的条件であるという。日野さんは読売外報部の記者だが、文学もよくなさる。独特のねちっこい感覚は、むしろ文学的な質のものだ。しかし、読売きってのベトナム通である。その3条件は、われわれの村落調査についてもいえることではないか。などと考えているうちに、サイゴンに着く。

サイゴンに到着するやいなや、読売の現地

特派員の小倉さん、奥山さんから一通りの手ほどきを受けたあと、まず忙しいインタビューを始めた。1日平均6～7人の面接は少ししんどい。しかし、MACV（米ベトナム援助軍司令部）を通ずる限り、ほとんどの人物に会うことができる。アポイントをとる手間もはぶけるから楽だ。サイゴンの米軍関係者がよかれあしかれ官僚的であるのが印象的だった。

たしかに、ベトナム旅行は新聞記者の資格ですらに限る。南ベトナムでは、報道関係者はまったく万能である。学者ではこうはいかない。第1、どこに行こうと交通宿泊の心配がいらぬ。軍の設備がフルにつかえる。第2に、情報資料が自由に入手できる。第3に、オフリミットの制約がほとんどない。要するに、新聞記者証がある限り、米軍や韓国軍が待ち構えていたかのように、至れり尽くせりのサービスをしてくれるのだ。連中にとってもっともこわい敵は、解放戦線ではなくて、ジャーナリズムであるかのようにであった。

二、三日サイゴンにいる間に、ベトナム取材の技術的な問題の所在がはっきりした。第1に、下手をすると、米軍や韓国軍の用意するきれいづくめの定食コースだけ見せられてしまう。だから、臨機応変に、こちらの甲斐性で別のコースを探し求めねばならない。第2は、ベトナム全体が戦線なき戦場だから、米軍の軍用機に乗るときは軍服を着て、そうでないときは平服を着るというたぐいの心遣いが必要だということ。第3に、通訳の問題。奥山さんがフランス語の達者なベトナム青年を探してきて下さった。小心で小ずるような男だった。短期間のあいだにこいつをどう活用するかは問題だった。政治的なヒモの有無も気になった。第4に、大きな問題だが、私の内なる心眼が心配だった。ベトナムでは、昼となく夜となく、劇的な情景がふんだんに発生している。そのなかから大事な事柄と末

稍的な事柄とをどう見分けるかは、私の問題意識の水準いかんできまるのだ。あまりに多くの刺激的な光景にめくらみつつ、私はすっかりしるよと、自分に言いきかせ続けた。

幸い、食物のほうは案ずるほどのことはなかった。唐辛子をつかわないだけ、タイやマレイの田舎料理よりましである。

不思議な戦争

四、五日足らずで、私は農村に飛び出した。北の非武装地帯付近は敬遠し、もっぱらダナン以南に行動範囲を限ったが、それでもベトナム戦争のおおよその様相はわかった。

ベトナム取材は楽ではない。まず暑さには往生した。最高 42°C を経験する。僻地への唯一の交通機関である軍用輸送機には、時間表などない。田舎の飛行場で、数時間待たされるのに慣れねばならない。いつ離着陸したかわからない無愛想な輸送機に数回乗っているうちに、やがてベトナムずれてくる。そして、G I をからかいながら時間つぶしをする芸当もおぼえた。

万事にうんざりしながらも、時には「観光」気分になることがある。日頃新聞紙上で親しんでいる戦場を訪れるときには、こちらの心理は観光客のそれとまったく同じだ。Cゾーン、Dゾーン訪問などは、ベトナム「観

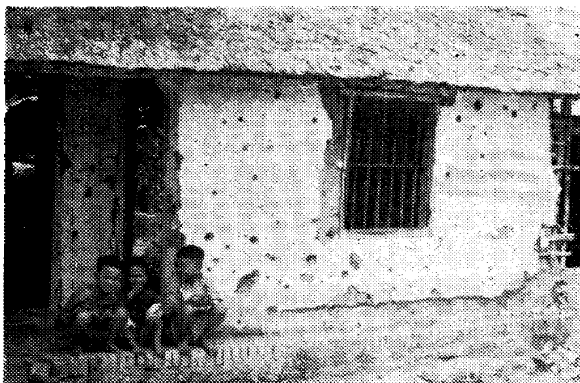


写真1 戦火に破壊された部落の子供たち
(ビンディン省にて一写真はいずれも筆者撮影)

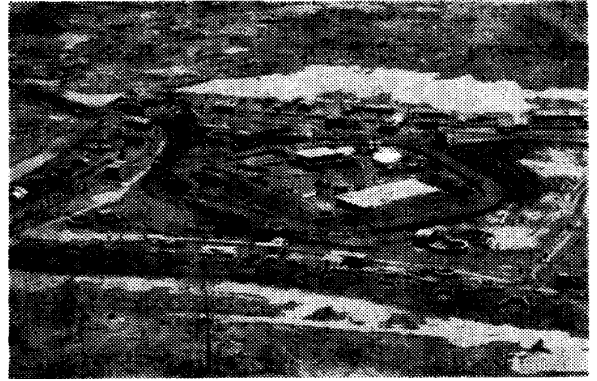


写真2 最前線の米軍基地をヘリコプターから撮影。タイニン北方のカンボジア国境寄りの地点にある

光」のいちばん粹なコースである。もっとも、機関銃をつけるためわき腹が開きっぱなしのヘリコプターは、写真撮影には便利だが、旋回するときなど、あまりいい気持ではない。タイニンの町、「ベトナム 富士」の頂上そして最前線の某基地に着陸する以外、数時間飛びっぱなし。危険な地帯を飛ぶときは、地上からの砲火を避けるために、高度が極端に高くなったり低くなったりする。

ベトナム「観光」は、場所が場所だけに、浮わついた気分は長続きせず、いつしか深く滅入った気持ちに導かれがちだ。たとえばこのCゾーン、Dゾーン。見渡す限り、広漠たる森である。有名な枯れ葉作戦のために、眼下の森はことごとく灰茶色を呈し、裸木だけが残されている。広大な森がみごとに死んでいる。目をこらして地表をみるが、猫の子一匹いない。夜間に米軍陣地を襲う解放戦線の部隊は、いったいどこに潜んでいるのか。この謎を解こうとすると、もう「観光」気分ではいられなくなる。

枯れ葉作戦が示すように、アメリカの闘い方は理詰めだし、徹底している。ベトナムの米軍は、全体としてはまるで一つの会社組織のようだ。精密な分業化のため、コーヒーをいれる兵士は年中コーヒーをわかしている。豊富な人材を多種の仕事に余裕たっぷり使い

わけるので、戦闘に従事する員数は、全体の6分の1でしかない。

このような機械みみたいな合理主義にもかかわらず、戦争の展開がアメリカにとっておもしろくないのは何故か。もう一度、日野さんの文章を引用しよう。「その体系は実に見事だが、その完ぺきさは、アメリカ自身の世界政策の原理や定理から数学的に割りだされたものであって、南ベトナム自体のいりくんだ現実、南ベトナム人たちのひだの多い感情と意思から割りだされたものではない。」この指摘はあたっていると思う。

戦線のない戦場という現実。これはすべての戦略の大前提を崩してしまう。南ベトナムで驚いたのは、いたる所に解放戦線側の兵士がいることだ。ファンラン省の田舎でムスリム部落を探していたとき、道ばたの藪から銃をもった2人の兵士がひょっこり現われ、車を止めたのには驚いた。幸い、かれらは人のいいここにこした中年の兵士で、国籍確認だけですんだ。もっている銃がちゃちなのが印象的だった。サイゴンにもショロンにも、解放戦線のオルグは無数にいる。もっとも、解放戦線の実力をもってしては、米軍に勝てな



写真3 南ベトナム取材中の筆者（中部海岸地帯、韓国軍平定地域にて）

いことも事実だ。かれらは、しぶとくたくましく「生存」しているだけなのだ。その能力は十分に備えている。だから、結局、ベトナム問題の軍事的解決は無理なのだ。

しかし、不可解なのは、ベトナム内部のどこにも悲観主義がないことだ。勝気と強気と自負心の氾濫。それでいて、すべてが停滞し劇的な進展は一つもない。双方の強気がいつまでも長続きするのは何故か。つまるところ、それぞれが自家版のベトナム情勢を描きあげているからなのだ。そして、どのように描いても、さほど現実からずれないところに、ベトナム情勢の不思議さがある。

サイゴンの米軍当局はまったく強気であった。勝てないはずはないという楽天的な確信があった。と同時に、サイゴンで解放戦線側から得られる情勢によると、このほうも最後の勝利を信じ、強気一本槍であることがわかった。強気同志の主人公たち、噛み合わぬ戦略、進展なき戦況。私が肌で感じた戦争の展望はこれは長びきそうだということだった。

ベトナム人の不幸

戦争が長びくと、迷惑を蒙るのはベトナム民衆だ。もっとも、私は社会学者として、「民衆」とか「人民」とかいう曖昧な概念は好んで用いたくない。戦火に傷つく民衆、などという社会的センチメンタリズムにもなにかしらなじめない。それでも、私は、ベトナムの人間が戦争で迷惑を蒙っている情景にいやというほど接した。かれらは、おおむね中央の権力から遠い存在だ。そして、かれらの苦しみは、人間の本当の不幸が何であるかを暗示していた。人間の苦しみとは相対的な事柄なのである。

私が目撃した二つの不幸。

ジャライ族は、カンボジアに接する中部山岳地帯に静かに住んでいる少数部族である。ところが、かなりの数のジャライが、いまは



写真4 私の目の前で演じられたジャライ族の葬式。民兵がこと細かく指図している。(プレイク南西 20km の山岳民族避難民キャンプにて)

米軍の人払い作戦のために、伝来の土地から離され、プレイク東方のきらきらしたトタンぶきのキャンプに収容されている。人目を隔てる樹木が1本もないむきだしのキャンプ。碁盤目のように整然たる路。連中はこれまでこんな真直ぐの路など歩いたことはなかったのではないか。30もの部落の住民が一つのキャンプに無配慮に収容され、権威の区画もわからなくなっている。呪術師も族長もまるで威勢がない。私は信じられない光景をみた。1人の女が死んだ瞬間に、その光景は始まった。ジャライの葬式を見られると舌なめずりしたのは早計だった。ベトナム人の民兵たちがやってきて、死体を布でくるみ、手際よく木棺に入れ、またたく間にどこかに運び去ってしまった。死んだ女の夫は、終始にこにことそれを眺め、饒舌であった。親類縁者は遠巻きに兵士たちを眺めていた。ジャライ族は、ポリネシア系のすばらしい儀式文化をもっている。儀式はかれらの実在に意味づけするすべてなのだ。それに、ジャライは、本来物静かな種族なのだ。死者の夫の笑いと饒舌は、かれのノイローシスを明白に物語っていた。ベトナム戦争という文明人の行ないは、だれよりもジャライ族を不幸にしている。

しかし、私の知ったチャム族の悲劇はより深刻だった。チャム族は、かつてのチャンバ

帝国をつくっていた種族だが、いまでは、ファンラン地方とデルタの西より国境地帯に、約4万残っているだけである。かれらのほとんどがイスラムを信仰している。ムスリム好きの私は、取材のあいまに、ファンランとチャウドクの両方でチャム族の部落を訪ねてみた。二つの地方ではたいへんな違いがある。チャウドクのは、完全にマレイ系の文化様式を示しているのにたいし、ファンランのチャムは、チャム古来の伝統をいくぶん残し、イスラム信仰の様式も少し風変わりだった。ファンラン郊外のある部落で不幸な話をきいた。

メッカ詣でに行こうと長年貯金していた老人たちが、治安不良のため部落を出ることが許されず、旅券申請すら許されず、夢を実現できぬまま幾人も死んでしまったという。そういえば、ファンランの町からサイゴンへのバス交通はとまったままだ。その部落は、木の矢来で囲まれ、正に戦略村もどきの格好であった。部落の入り口には、民兵が銃を構えていた。ときどきベトコンがやってくるという。イスラム教徒とベトコンとに、どういう共通の話題があるのだろうか。

メッカに行けないムスリム！部落のマスジット（祈禱堂）は修築中だったが、色彩豊かな豪華なものだった。住民の執念をその異様



写真5 南ベトナム地方選挙立候補者のピラ。候補者名がみなイスラム名前であり、また各候補者が自分の絵シンボルをもっている点がおもしろい。(チャウドク省イスラム部落にて)

な豪華さにみた。

人間の不幸とは、個有の文化を満喫できず、また異質の文化を無理に強いられることではなからうか。

国家不在の南ベトナム

ところで、南ベトナム全体としての問題はなんであろうか。国内が戦地になっている不幸以外に何かがある。この問題を現地で考えているうちに、Carver Jr. がかつてForeign Affairs に書いた「本当の革命」論が、ベトナム戦争を一つの創造過程として捉えるよう、くどく説いていたのを思い出した。南ベトナムに欠けているのは、かれが創造のさなかであると説いた事柄なのだ。

カンボジアとの国境を調べるために、チャウドク省をさまよっていたある日のこと、私は、おもしろいコントラストをみた。1人の中年男が、所在なげにぼつねんと立ちつくす。その傍を、黒いパジャマ服の若者たちがさっそうと動きまわっている。若者たちの眼中には中年男はまるで存在しない。その男は、国家警察所属の警官だった。そして若者たちは、革命発展計画の工作人員である。

一般に、後進国の近代化過程で、国家権力の役割について政治的な啓蒙を行なうのは、ふつうは警察である。警察権力は、国家権力の公共性と社会の治安安寧の意義を国民に教えるのだ。ベトナムでは、警察があまりに目立たなすぎる。特殊な戦争のためだろう。警察本来の任務である治安の維持は、警察権力ではどうにも処理できず、平定計画が肩代わりすることが多い。なにしろ、1963年までは、集権的な国家警察がなかったのだから無理はない。この四、五年のアメリカのてこ入れで、急に成長したものの、戦争のおかげで任務遂行に障害が多く、何をしたいか途方に暮れている有様だ。ベトコンのテロも、もっぱら対象は平定計画の工作人員や村長に向けられて、

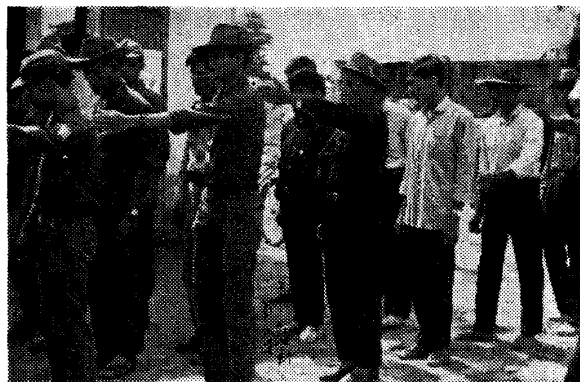


写真6 捕虜になった解放戦線側の兵士が、時には政府軍に編入されることがある。右端の数人はビンディン省民兵に選抜されたばかりの元ベトコン容疑者。まだ、しぐさがぎこちない。(ビンディンのチューホイ・センターにて)

警官はあまりやられない。

警察の無能が象徴するように、南ベトナムは、近代国家としての基盤をあまりに欠きすぎている。農村をまわって、農民を面接して驚いたことには、政治意識や国民意識がまるでない。かれらの政治的忠誠は、もっぱら、かれらが生まれ育った部落(aph)に向けられている。ベトナムの長い戦乱の歴史を考えると、だれしもベトナム農民の尖鋭な政治意識を期待しがちだが、事実はまるで違う。その理由を考えてみると、実は簡単だ。社会の混乱が続けば続くほど、農村個有の自営のメカニズムと権威関係が強められ、農民はますます家や村の秩序にしがみつくからだ。治安の乱れが続くだけ、農民は中央の権力から遠ざかるものなのだ。

私の受けた感じでは、南ベトナムは統一国家ではなく、“aph”の集合体でしかないようだった。国家の存在や政府への忠誠を前提とする平定計画やさまざまな政策が、ことごとく失敗するのも無理はない話だ。国家の地理的な枠が確定し、その枠内に秩序が確保されてはじめて、近代化の議論も政策の立案執行もできるのだ。「本当の革命」もまだ先が長いようだ。
(1967年11月5日)